

第7章

ESD情報を共有する

<情報共有プロジェクト>

情報共有プロジェクト 2007 年度の活動

情報共有 PT は、ESD および ESD-J に関する情報の収集・発信を通じて、会員内外へ ESD および ESD-J の理解を促進し、ESD 活動の活性化を図ることをミッションであるが、2007 年度は、ウェブサイトの充実によりアクセス数が大幅に増加し、非会員をも読者にしたメールマガジンが開始されるなど、電子媒体を中心に大きな前進があった。また、地域ネットワーク PT との連携でウェブを活用した地域リポーター制度がはじまり、情報ソースの多様化の可能性が開かれたことも、大きな前進点である。

2007 年度 活動の概要

(1) ウェブページの充実

ウェブサイトは、つねに新しいコンテンツが掲載されている状態の維持につとめ、アクセス数を 2 倍にふやすことを目指した。その結果は、たとえばトピックス記事は、2006 年度の年間 24 本から 61 本へ増え、アクセス数も年間 36 万ページビューから、48 万ページビューへと、25% 増やすことができた。

また地域ブログコーナーを新設し、地域の活動を ESD-J のサイトを通じて会員自らが発信、対話ができるしくみを設けた（地域リポーター制度）。

(2) メールマガジンの発行

会員だけでなく、非会員にも ESD に関する情報を積極的に発信することにより関心保持層を拡大し、ESD-J のネットワークへの会員増へつなげることをめざして、メールマガジンの発行を開始した。内容的には ESD に関する政府や地域の動き、ESD レポートの記事紹介、主催、共催イベントの案内などを中心とした。

配信先は会員約 400 件、非会員約 1400 件（非会員は、主に ESD 関連会合の参加者や、セミナー参加者、テキストブック購入者などを元にアドレスを把握）。

(3) 「ESD レポート」の発行

「ESD レポート」は経費の関係で、従来の年 4 回から、以下の 3 回に減らして発行した。12 号（10 月）、13 号（12 月発行）、14 号（3 月発行）。発行部数は 6000 部。表紙をビジュアル化するなど、2006 年度以来のビジュアル化をいっそう進めるとともに、発送先に見直しを加え、発送先を 530 箇所から 600 箇所に増やした（新しく増やしたところは、主に議員、マスコミ、企業、行政など）。

(4) ESD & ESD-J リーフレットの発行

在庫が切れた小冊子「ESD がわかる！」につづく、ESD (ESD-J) 紹介ツールとして ESD & ESD-J リーフレット「持続可能な社会の人づくり」を作成（B5 サイズ、12 ページ、4 色、1 万部作成）。ビジュアルにし、かつ、よりわかりやすい言葉と構成で ESD や ESD-J について紹介。イベント等での大量の配布申し込みには、増刷準備金として、1 冊 50 円の寄付を依頼し、今年度約 65,000 円の寄付を得た。



情報共有プロジェクトチーム・リーダー 清水 悟

今後の活動の方向性

2008年度以降の取りみに向けて検討すべき課題は、以下のとおり。

(1) 情報PTの体制強化とウェブ、メルマガの充実の課題

ウェブ部分を担当した前川理事や佐々木事務局員の頑張りで、2007年度は、前述のようにとくにウェブサイトで大きな前進を遂げたし、地域ネットワークPTとの連携による地域リポーター制度のように、他のPTとの連携による情報ソースの多様化の試みもはじまつたが、地域リポーター員のいっそうの増加や、理事や情報PTメンバー、複数の事務局員等によるウェブの情報量のアップ、メールマガジンの充実などが求められる。

(2) 「ESDレポート」の発行

会員の閲覧率調査を検討したい。内容的には、ノウハウ系コンテンツ（地域のコーディネーターを毎回1名取材し、地域をつなぐノウハウを紹介）、情報系コンテンツ（ESDの導入などに使えるワークショップ教材の紹介、各国のESD事情の紹介など）、会員紹介（新しく会員に加わった団体、個人を紹介）などを検討する。

(3) 「ESDの10年」研修用テキストブックの制作・販売

テキストブックパート1は好評で、初版5000冊完売のために、3000冊増刷した。ESD教材づくりの事業化の可能性もあるが、一方でリスクもあるから、慎重な検討が必要である。まずは、求められているテーマや企画の角度等について、関係者で検討することからはじめたい。

ESD-J ウェブサイトの運用

会員内外への情報発信メディアとして、2007度はウェブサイトによる情報提供を重要視し、情報発信の強化につとめました。例えばトピックス記事は2006年度の年間24本から61本と大幅に増やしたほか、ESDレポートへ掲載した事例紹介やESDのキーワードなどを掲載しました。またESDメールマガジンを2007年度より発行し（☞170ページ）、コンテンツの詳細をWEBに掲載することで、WEBへのアクセス率も向上を図りました。その結果、アクセス数を年間36万ページビューから48万ページビューと25%アップを実現しました。

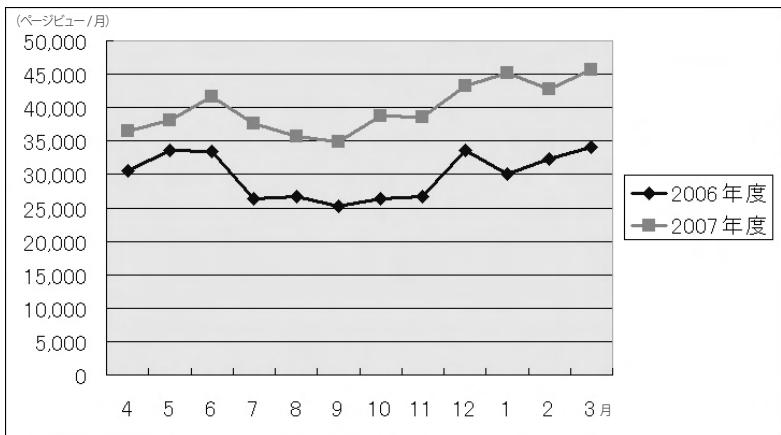
また ESD 地域ブログコーナーを新設し、地域の活動を ESD-J のサイトを通じて会員自らが発信、対話



ESD-J トップページ <http://www.esd-j.org/>

ESD 地域ブログのトップページ

ウェブサイトの月間アクセス数推移



閲覧コンテンツ BEST10

順位	2007 年度	閲覧数	推移
1 位	ESD とは	3209	→
2 位	ESD-J とは	1054	→
3 位	事例に見る ESD	858	↗
4 位	全国ミーティング案内	794	↗
5 位	キーワード	703	↗
6 位	緊急提言「地球税」	686	↗
7 位	会員ネットワーク	620	→
8 位	発行物ダウンロード	567	→
9 位	イベント案内一覧	531	↓→
10 位	Q&A	530	↓→

2006 年度	閲覧数
ESD とは	2165
ESD-J とは	929
イベント案内一覧	778
テキストブック販売	759
事例に見る ESD	657
キーワード	601
会員ネットワーク	547
発行物ダウンロード	507
Q&A	477
入会案内	409

(2007 年度：1 月 3 日～2 月 14 日、2006 年度：1 月 5 日～2 月 16 日)

検索語句 BEST10

順位	検索数	検索語句
1 位	1699	ESD
2 位	410	ESD-J
3 位	153	ESD とは
4 位	141	キープ協会
5 位	69	持続可能な開発のための教育
6 位	39	ガソリン税
7 位	23	ヒューライツ大阪
8 位	23	パラダイムシフト
9 位	22	堺市女性団体協議会
10 位	16	キーパーソン 21
10 位	16	学際的とは

(2008 年 1 月 3 日～2 月 14 日)



2007 年度の ESD レポート (Vol.12 ~ 14)

紙面による情報発信

2007 年度の ESD レポートは、経費の関係で年 3 回の発行となりましたが、継続的に発行していました。また、地球環境基金の助成を受けている地域プロジェクトについては「地域プロジェクトレポート」とし、コンテンツのすみ分けを行いました (☞ 169 ページ)。インターネットを通じた情報発信を積極的に展開する一方で、機関誌の位置づけを再度みなおし、「保管したくなる情報」の掲載を基本的な方針としました。具体的にはニュース的な記事よりも、地域の ESD 事例や Q&A、キーワードなどの掲載や理事からのオピニオンを中心とした編集を行いました。また、はじめて本誌を手にとる人を増やすためにビジュアルな表紙を心がけました。

また、政府関係者、議員、地方自治体、マスコミ、企業の CSR 担当者などを中心に、発送先を 530 カ所から 600 カ所に拡大し、会員外への情報発信も積極的に行いました。

編集スタッフの固定化という課題の改善は果たせませんでしたが、ボランティアグループやインターン学生との連携などを 2008 年度も積極的に行い、編集スタッフの拡大をめざします。

発行部数：6000 部 発送先：600 カ所

第 12 号 (10 月 12 日発行)

- ◆シリーズ 学びの場をデザインする
「むら」のくらしがぼくらの先生！ —緑のふるさと協力隊—
- ◆ESD-J 理事からのメッセージ 〈竹内 よし子、清水 悟〉
- ◆トピックス 〈ユネスコへの提言案議論、環境省 ESD 促進事業〉
- ◆私たちが ESD-J に入ったわけ 〈(財) 公害地域再生センター〉



第 13 号 (12 月 25 日発行)

- ◆シリーズ 学びの場をデザインする
学校を世界に開く～学校全体で取り組む ESD —江東区立東雲小学校—
- ◆ESD-J 理事からのメッセージ 〈重政子、岩崎 裕保〉
- ◆トピックス 〈AGEPP 特別セッション開催、ESD-J ボランティア & 学習会〉
- ◆私たちが ESD-J に入ったわけ 〈倉吉北ライオンズクラブ〉



第 14 号 (3 月 7 日発行)

- ◆シリーズ 学びの場をデザインする
チョコレートから世界が見える—NGO と教員で ESD 教材を開発
- ◆ESD-J 理事からのメッセージ 〈山本 幹彦、大前 純一〉
- ◆トピックス 〈緊急提言「ガソリン税の上乗せ分は『地球税』に！」〉
- ◆私たちが ESD-J に入ったわけ 〈東洋製罐株式会社〉



地域プロジェクトレポート (2007年10月～2008年3月)

2007年度より地球環境基金で助成を受けている各種事業を、「地域プロジェクト」と呼び、その進捗報告は、「地域プロジェクトレポート」として、従来発行してきたESDレポートとのすみ分けを行いました。

メインのコンテンツは、①ESDを多様な〇〇教育のネットワークと理解して、そこから地域での異分野連携をつくりだしていくこうとする「ESD分野連携ワークショップ」(3地域で実施 78ページ)、②「プロセス抽出ワークショップ」(2地域で実施)を実施し、その成果を分析した「既存の学習にESDを溶け込ませるプロセスの提案」(58ページ)の2つです。

また、年度後半からスタートした地域ESDブログ(97ページ)のレポーター紹介やアップされた記事の抜粋なども紹介し、メディア同士の連携を心がけました。



地域プロジェクトレポート 10月

- ◆プロジェクト1：ESD分野連携ワークショップ
 - ◆プロジェクト2：既存の学習にESDを溶け込ませるプロセス
- 「地域の学び」が発展してきた歴史から学習戦略を抽出する
- ◆ESDなんでも相談室：ESDを学校で取り組むには？
 - ◆ESD基本用語集：ハーグ平和アピール、食育基本法
 - ◆地域ミーティング開催地域にアンケート



地域プロジェクトレポート 12月

- ◆プロジェクト1：ESD分野連携ワークショップ
 - ◆プロジェクト2：既存の学習にESDを溶け込ませるプロセス
- 地域のESDの発展における公共的学習支援機関の役割
- ◆ESDなんでも相談室：持続可能な開発のための教育の「開発」とは？
 - ◆ESD基本用語集：ユネスコ学習権宣言、ノーマライゼーション
 - ◆ESD地域レポーターの「ブログ」がスタート！



地域プロジェクトレポート 3月

- ◆プロジェクト1：ESD分野連携ワークショップ
 - ◆プロジェクト2：既存の学習にESDを溶け込ませるプロセス
- 市民の主体的な学びと今後の発展にむけた課題
- ◆ESDなんでも相談室：ESDを企業の取組みに活かす方法は？
 - ◆ESD基本用語集：エコミュージアム、多文化共生
 - ◆from ESD地域レポーター

ESD と ESD-J を伝える新ツール

ESD リーフレット『持続可能な社会のための人づくり』

ESD と ESD-J を紹介する配布用のツールとして 2004 年に作成した『ESD がわかる!』は、4 万部すべてを配布し終えたので、2007 年 12 月にさらに内容を充実させた ESD リーフレット『持続可能な社会のための人づくり』を発行しました。

ESD が生まれた経緯、ESD の基本的な考え方、大切にしている視点、実践事例、さまざまな教育分野の人たちのメッセージ、ESD-J100% 活用マニュアルなど、ESD および ESD-J のことをコンパクトにまとめた冊子としました。

おもに ESD に関するセミナーやイベントなどで、ESD および ESD-J の認知度拡大の配布用ツールとして活用しています。会員だけでなく、ESD を紹介するツールとして利用したいという非会員の方にもお渡ししていますので、事務局までお問い合わせください。

B5 サイズ 12 ページ

価格： 無料

但し、セミナーなどで 10 部以上の配布をご要望の場合、今後の増刷経費を積み立てていくことを目的に 1 冊あたり 50 円程度のご寄付を申し受けおりますので、ご協力よろしくお願ひいたします。

申し込み・お問い合わせ：admin@esd-j.org



メールマガジン「ESD つながるマガジン」の発行

これまで ESD-J に加入していない方への情報提供は、おもに WEB サイトへの情報発信を通じて行ってきました。しかし、ESD に関する国内外の動きを非会員の方たちにも積極的に伝えていくために、2007 年 7 月よりメールマガジンの発行を開始し、本編 5 本、臨時号 3 本を発行しました。記事の内容は、ESD に関する政府の動き、地域の動き、世界の動き、ESD レポートの記事紹介、主催、共催イベントの案内などを中心とっています（☞次ページ）。2008 年 3 月末時点での発行数は、非会員 1400 件、会員 400 件。来年度は、ESD 地域ブログと連携して地域の動きを紹介し、理事によるリレーコラムを開始するなど、内容面での充実も図る予定です。発行期間のばらつきなど課題はまだまだありますが、継続的に実施していきたいと思います。

第1号 7月11日配信

1. 参院選へ向けた公開質問状 各党のESDに対する意識は？
2. 岩手大学「学びの銀河」プロジェクト
3. CSRの世界動向とESD
4. ローカルアジェンダ21（LA21）の国際的な動向

第2号 8月20日配信

- <政府への働きかけ 動向最前線>
1. ESD関係省庁連絡会議・幹事会が開催
 - <地域からはじめる×すすめるESD>
 2. ESD-Jの地域プロジェクト2007がスタート
 3. ESDの10年促進事業で新たに4地域が採択
 - <国際的なESD関連情報>
 4. EUにおけるESD事情
 5. ESDの国際的な会議動向と関係機関の動き
 - <研修・普及活動から>
 6. 学校教育におけるESDの可能性を考える
 - <その他>
 7. ESD-J主催、共催、後援、協力事業・イベントの紹介

第3号 10月15日配信

- <政府の動き最前線>
1. ユネスコ国内委員会からユネスコへの提言
 - <地域からはじめる×すすめるESD>
 2. 地域でESDをすすめるため課題解決の第1位は「人材」
 - <ESDの国際動向ウォッチング>
 3. ESDの指標ガイドラインが公表
 - <伝える！広げる！ESD>
 4. 企業とESDの接点はあるのか？
 5. 地球パートナーシッププラザにESDコーナーがオープン！
- <おすすめの本>
- あなたの暮らしが世界を変える
- <ESD主催・共催・協力イベント情報>
- ・ 第4回ESD-J国際ネットワークカフェ
 - ・ 第2回ESD学習会
 - ・ 2007年度「市民のための環境公開講座」
 - ・ KominkanサミットinOkayama

第4号 12月25日配信

- <地域からはじめる×すすめるESD>
1. ESDレポーターってどんな人？
 - <世界のESDを伝えます>
 2. アーメダバードでAGEPP特別セッションを開催
 - <伝える！広げる！ESD>
 3. ESDとESD-Jを紹介するリーフレットができました
 4. エコプロダクツ展にESD-Jが出展しました
- <ESD主催・共催・協力イベント情報>
- ・ ESD-J全国ミーティング2008
 - ・ 第5回ESD-J国際ネットワークカフェ
 - ・ 第4回ESD学習交流会
 - ・ ACCUアジア太平洋ESDフォトコンテスト『明日への手紙2007』

第5号 2月14日配信

- <ESD主催・共催・協力イベント情報>
1. ESD-J全国ミーティング2008申し込み受付中！
 - <地域からはじめる×すすめるESD>
 2. ESDレポーターの地域情報配信中
 - <ESDの国際動向ウォッチング>
 3. インドでDESDウェブサイトが立ち上りました

臨時号3本(7月、12月、2月)

・配信先：会員約400件、非会員約1,400件





ESD-J の情報媒体をどう評価する？

先に紹介しました会員からのアンケート（☞ 49～54 ページ）のうち、情報発信・共有に関するものを、整理してご紹介します。

（回答数：団体会員 5、個人会員 23 合計 28）

Q. ESD-J の情報発信についてお聞かせください

◇ ESD レポート

利用状況		発行・情報更新頻度		情報量		内容	
1. 全体をとおして読んでいる	16(57%)	1. 適切	20(71%)	1. 適切	20(71%)	1. とても満足	2(7%)
2. 興味のある内容のみ読んでいる	10(36%)	2. 不足	5(18%)	2. 不足	6(21%)	2. おおむね満足	18(64%)
3. 読んでいない	1(4%)	3. 過剰	0	3. 過剰	0	3. やや不満	5(18%)
4. 届いていない	1(4%)	4. その他	3(11%)	4. その他	2(7%)	4. とても不満	0
						5. その他	3(11%)

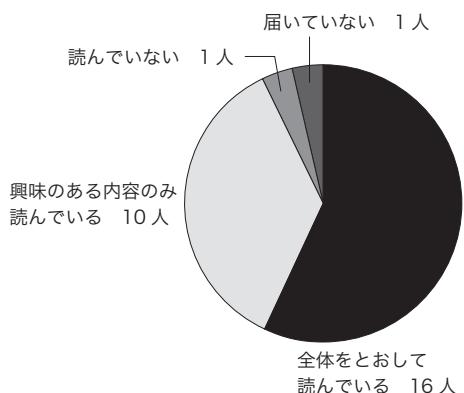
◇ 活動報告書

利用状況		情報量		内容	
1. 全体をとおして読んでいる	9(32%)	1. 適切	19(68%)	1. とても満足	2(7%)
2. 興味のある内容のみ読んでいる	12(43%)	2. 不足	1(4%)	2. おおむね満足	18(64%)
3. 読んでいない	4(14%)	3. 過剰	0	3. やや不満	0
4. 届いていない	3(11%)	4. その他	8(29%)	4. とても不満	0
				5. その他	8(29%)

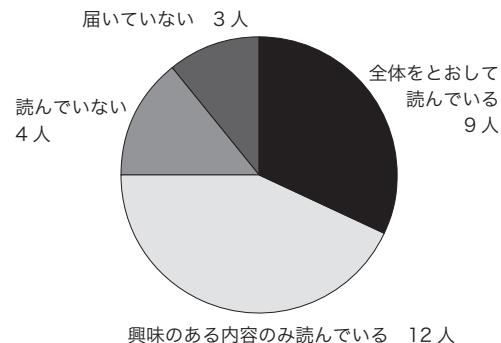
◇ 入門テキストブック

利用状況		情報量		内容	
購入した	17(61%)	1. 適切	15(54%)	1. とても満足	1(4%)
購入していない	11(39%)	2. 不足	3(11%)	2. おおむね満足	10(36%)
		3. 過剰	0	3. やや不満	6(21%)
		4. その他	10(36%)	4. とても不満	0
				5. その他	11(39%)

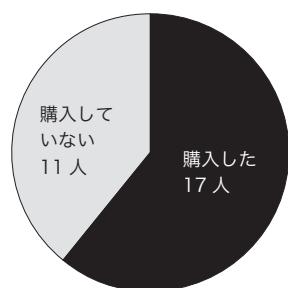
ESD レポート利用状況



活動報告書利用状況



入門テキストブック利用状況



◇ウェブサイト

利用状況		発行・情報更新頻度		情報量		内容	
1. 頻繁にアクセスしている	6(21%)	1. 適切	10(36%)	1. 適切	10(36%)	1. とても満足	1(4%)
2. たまにアクセスしている	16(57%)	2. 不足	10(36%)	2. 不足	10(36%)	2. おおむね満足	10(36%)
3. ほとんどアクセスしない	6(21%)	3. 過剰	0	3. 過剰	0	3. やや不満	8(29%)
		4. その他	8(29%)	4. その他	8(29%)	4. とても不満	1(4%)
						5. その他	8(29%)

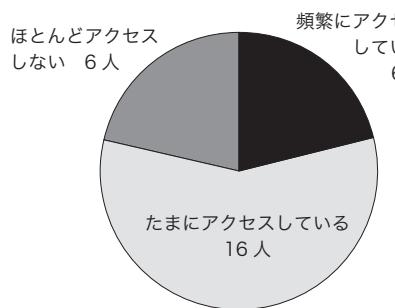
◇会員メーリングリスト

利用状況		内容	
1. 積極的に受発信している	3(11%)	1. とても満足	3(11%)
2. 投稿はほぼ閲覧している	12(43%)	2. おおむね満足	13(46%)
3. 興味のある投稿のみ閲覧している	9(32%)	3. やや不満	6(21%)
4. ほとんど見ていない	1(4%)	4. とても不満	0
5. 届いていない	3(11%)	5. その他	6(21%)
6. その他	0		

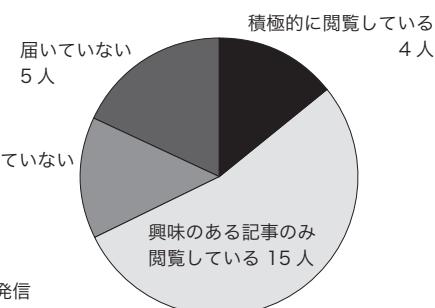
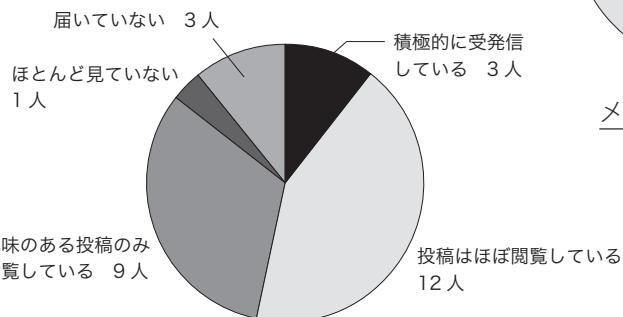
◇メールマガジン

利用状況		発行・情報更新頻度		情報量		内容	
1. 積極的に閲覧している	4(14%)	1. 適切	12(43%)	1. 適切	12(43%)	1. とても満足	0
2. 興味のある記事のみ閲覧している	15(54%)	2. 不足	6(21%)	2. 不足	6(21%)	2. おおむね満足	12(43%)
3. 閲覧していない	4(14%)	3. 過剰	0	3. 過剰	0	3. やや不満	3(11%)
4. 届いていない	5(18%)	4. その他	10(36%)	4. その他	10(36%)	4. とても不満	0
						5. その他	13(46%)

ウェブサイト利用状況



会員メーリングリスト
利用状況





会員アンケート!

◇ ESD-J の情報発信・発行物全般に対するご意見、ご要望など

- ✉ さまざまな情報を発信していただいておりますが、教育現場におられる方々のものなどかなりアカデミックな内容だったりで、つい最後まで読みきらなかったりすることもあります。もう少し積極的にかかわるのにはこの敷居を低く設定することかな、と思い自分で成長しなければと思っております。
- ✉ インナーむけとアウターむけ、2分化してはいかがでしょうか。ESD というキーワードを広く社会に浸透させるために、外部むけのツールが必要だと思います。
- ✉ ウェブサイトについては、さらに活用できる可能性がありそうに思います。草の根の ESD 実践、地方の動き、息吹が伝わるような情報を相互に発信しあえる場としての活用など。さらにこれからは、多様な一般向けメディアに ESD をどう露出させていくかということにも取り組みたいですね
- ✉ もっと具体的な実践を紹介すべき。理論はもういい、実際に暮らしのなかでできていることやしなければならないことなどを中心に載せてほしい。行政や世界の動きも大切ですが、個々人ができることをもっと紹介すべき。
- ✉ ESD-J の情報はほぼ目をとおしており、上記の頻度や情報量などは適切と感じているが、それを活用するのは私自身であり、活用度合いは低いと思う。
- ✉ 人によって情報接触はちがうので、なにがいいとは一概にいえないでしょう。多様な形で発信しつづけるしかないでしょうね。ちょっと紹介すると、みなさん、各自で HP を調べにいくので、HP の充実は大切でしょうね。
- ✉ 全体として情報発信が弱い印象を受けます。ESD-J としてなにをしているかのみならず、日本および世界の ESD の情報などもどんどん発信していただきたいと思います。
- ✉ テキストブックの第二弾を楽しみにしています。活動報告書は全部を分厚い紙媒体にしても、全部読む人は少ないと思います。細かい事業については Web 上で公開し、資料価値の高い部分をテーマ別に小冊子にして売れる形にした方が読まれるし、事業収入も得られると思います。
- ✉ むずかしい言葉を使ってないのでわかりやすい。
- ✉ ニュースレター、団体紹介など、この一年、手にした情報から、よりわかりやすく、より多くの人に、ESD-J の活動を知ってもらおうという努力がうかがえました。
- ✉ 一部、費用をかけ過ぎのものがある。
- ✉ ESD-J の情報発信に多くの会員がかかわるようなシステムにすることが必要と思う。

-
- ✉ 私の問題意識や取組みの発信をもっとしていけばいいのかなとも思いますが、その一方で現在発信されている内容の多くが環境に関するものが多く、受け手を意識して発信しようとすると、文章を一つ書くだけでも相当な労力を要するために、結果として沈黙してしまっています。
 - ✉ ESD (-J) が多分野にわたる協同の取組みであることを意識するともっといろんな分野の取組みを紹介し、つながりを模索する必要があると思います。

各メディアの利用状況に関しては「積極的な利用」「興味のある記事などのみ利用」を足すと、ESD レポート 93%、活動報告書 75%、テキストブック %%、ウェブサイト 78%、メーリングリスト 54%、メルマガ 68%、という結果でした。利用頻度としてはけっして低い数字ではありませんが、アンケート回答者が積極的に ESD-J にかかわっている方と考えると、まだまだということだと思います。とくに現在会員間の双方向性が担保されている唯一のメディアであるメーリングリストの活用頻度が低いことは、ネットワーク団体として改善の必要性を感じました。

内容に関しては ESD レポート、活動報告書に関しては、満足、おおむね満足の合計がともに 71% であったのに対し、テキストブックは 40%、ウェブサイト 40%、会員メーリングリスト 57%、メルマガ 43% と内容的な改善が求められていることがうかがえました。

フリーコメントとして、より実践的な情報を求める声や、会員からの情報発信を重視する声など、さまざまな意見が寄せられました。



シリーズ 学びの場をデザインする ⑤

「むら」のくらしがぼくらの先生！

緑のふるさと協力隊

生き方を模索する若者たち、過疎に悩む農山村——。NPO 法人地球緑化センターのプログラムは、農山村に興味をもつ若者を、地域活性化をめざす地方自治体へ一年間派遣するというものです。一年間という長い時間かけた、イベントではない、「暮らし」を通じた交流が、若者に生きる力や持続可能なくらし方・社会につながる価値観をもたらします。と同時に、農村にも元気を与え、地域の魅力再発見、自信回復につながっています。

NPO 法人地球緑化センター（GEC）の新田均さんと金井久美子さんは、都市化と農村の過疎化の問題、都市型の社会で追い詰められる青少年の問題の解決方法を探るなか、①地域の自然に根づいた緩やかな人間関係や、人間と自然の「いのちの連鎖」が存在している農村に、持続可能な社会づくりのためのヒントがある、②社会を変革するには、人間が内面にむかって反省していけるよう学びが重要、ということを考えていきました。そして 1994 年に、都市の若者とともに農村の＜持続

可能な地域づくり>をする活動に、<自己変革につながる学び>の要素を織り込んだ事業として「緑のふるさと協力隊」が企画されました。

一年間の農村での暮らし

浜松市「緑のふるさと協力隊」は、毎年、都市部の18～40歳までの20～30人の「隊員」を選出し、受け入れを希望する日本国内の20～30の農村部の自治体に一年間派遣します。隊員は、生活費5万円が支給される以外は、受け入れ先自治体が用意した活動に無報酬で従事します。派遣先での活動に伴い、派遣直前・派遣中・派遣直後の3回の研修への参加、月次レポートの提出、同期隊員間で持ち回り発行するニュースレターの作成が義務づけられています。派遣先での活動内容は、農林業や、派遣先自治体の公共施設での手伝い、イベントやお祭りの手伝い、特産物や工芸品づくりの手伝いといった地域おこし関連の活動です。

若者と地域双方の学び合い

この事業に参加した隊員からは、地域に根ざした伝統的な知恵や、いのちの連鎖、豊かな自然を基盤とした地域の人びととのつながり、多様な人びとの共存と、多様な生き方の尊重といったことについて学んだ、という声が寄せられています。この事業はまた、参加隊員のその後の人生の選択にも大きな影響を与え、事業開始以来、360 人中 141 人が派遣終了後に農村地域に定住しています。



岩手県住田町 地区のお祭りに参加

一方、農村の人びとにとっても、地域外の隊員との交流が、地域の伝統や文化、自然の魅力の再発見へつながる、あるいは、地域や自分自身の生き方に関心をもってもらうことが、地域で生きる喜びにつながっているそうです。

コーディネーターの存在

派遣される隊員が、派遣先の文化や環境、方言といった壁にぶつかることがあります。困難にぶつかる隊員たちが、自分の力で困難を乗り越え、人間として大きく成長するように支援していくことが、コーディネーターである金井さんの最大の役割だと語っていました。金井さんは、隊員が困難にぶつかるたびに、ひたすら隊員や地域の担当者の声に耳を傾け、隊員を地域の適切な人や場につなげながら、隊員が、自力で課題を克服する時期や場面をつくっています。そして、隊員が1年間の生活を終えて、「派遣先の土地に来てよかったです」「自分の故郷です」という言葉に、コーディネーターとしてもっとも喜びを感じるそうです。

まさに、この「緑のふるさと協力隊」は、農村における「くらし」そのものを、持続可能な社会を育む「学びの場」としてデザインしなおし、都市の若者と農村に住む人びとの双方に ESD 的な学びをもたらす事業だといえるでしょう。

(取材報告：野口 扶弥子)

「むら」のくらしは全力投球！

2005年に隊員として徳島県上勝町へ派遣され、大学卒業後この地で暮らしている上野あやさんより



私は上勝町で、しいたけ栽培と木材加工所、また個人農家の手伝い、それから町内イベントに参加しました。忙しい毎日でした。事業の活動以外にも、草刈りなどの地区活動や、季節ごとの祭り、スポーツ大会といったイベントや、準備もありました。

毎朝私は、60代の「きみちゃんとふみちゃん」の、餅つきの手伝いに行きます。家に近づくにつれて二人の笑い声が聞こえてきます。二人は、陽のあがる前から薪で火をおこし、臼と杵でお餅をつき、直売所に出荷します。茶摘み、木に登ってユズ採りもします。そして夕方が来れば男顔負けにお酒を飲みます。どの瞬間も真剣で全力投球です。

この町は、町全体がひとつの「学校」「カンパニー」「森」みたいな感じがします。自然界では、大きな動物も鳥も、虫や微生物も、みんなが役割をもち、つながりながら生きています。同じようにこの町では、一人ひとりが役割をもち、その個性が最大限に活かされ、頼られる存在になっています。



大分県豊後大野市 かやを葺く

価値観やスキル 育まれている	<ul style="list-style-type: none"> □ (持続可能な) 生き方・暮らし方 □ 伝統的な知恵・文化 □ 自然への畏敬、つながり □ 主体的な地域への参加 □ 昔ながらの人間関係（コミュニケーション） □ 地域の魅力（再発見）
重視されている学びの手法 重視されている学びの手法	<ul style="list-style-type: none"> □ 学習者の主体性を尊重した学び □ 現実的課題に実践的に取り組む □ 繙続性のある学び □ 多様な立場、世代の人びととともに学ぶ □ 人や地域の可能性を最大限に活かしている □ ただひとつのが正解をあらかじめ用意しない
コーディネーターの役割	<ul style="list-style-type: none"> □ 事業全体のマネジメント □ 行政への理解促進 □ 規制や制度の殻を破る □ 受け入れ自治体と派遣隊員のマッチング □ 参加者のケア

東京にいるときは、意思がなくとも生きていました。必要な物があれば、店に行けば手に入りました。物も、なんとなく持ちあげれば、持ちあがる「物」ばかりでした。私は、自分がどうしたいのか、ということより、ほかの人と一緒にすることを大切にしていました。上勝は、それでは生きていけません。物がなければ自分たちでつくります。いつも危険と隣り合わせの農林業は、「なんとなく」でやっていたら命を落とします。なんとなく持ったのでは、木材も鶴糞の袋も持ちあがりません。「よいしょ」と腰を使って、または知恵を使って真剣に「持つ」のです。

特定非営利活動法人 地球緑化センター（GEC）

緑のボランティアを育て、その活動を応援する団体です。個人やグループをはじめ、行政、企業、教育機関など、さまざまな人たちを対象に、多様な応援を行なっています。

〒104-0028 東京都中央区八重洲2-7-4 清水ビル3F
TEL 03-3241-6450 FAX 03-3241-7629
<http://www.n-gec.org/>

シリーズ 学びの場をデザインする ⑥

学校を世界に開く ~ 学校全体で取り組む ESD

東京都江東区立東雲小学校

ユネスコスクールに登録すると同時に ESD に取り組んで 1 年半。子どもも教師も親も、自分の学校や地域に自信と誇りが高まっています。それが地域、そして世界に働きかける原動力になっているのです。

きっかけはユネスコスクール

「東京都の臨海地域に学区域をもつ江東区立東雲小学校は、2006年度から全校をあげてESD教育計画を実践している画期的な学校です。その契機となったのは、ユネスコスクールへの登録でした。2003年からすでに国際理解教育を学校の特色として校内研究に位置づけ推進してきましたが、その過程で、ユネスコスクールのことを知り、「これだ！」ということで登録。多数の外国籍の子どもたちが通う東雲小学校では多文化共生は大きなテーマ。そのなかで、校長の手島利夫先生は、従来型の国際交流を中心とした国際理解教育の枠におさまらず、より広い視野での取組みの必要性を感じていたとき、ESDに出会いました。ESDを取り組んだ結果、「東雲小学校の教育は変わりつつある」「ESDは学校のなかで取り組む価値がある」と確信を得たそうです。

ESD カレンダーとその実践

東雲のESDへのアプローチはユニークです。

ユネスコスクール（ユネスコ協同学校）とは：
ユネスコスクール（ユネスコ協同学校プロジェクトネットワーク
"UNESCO Associated Schools Project Network: ASPnet"）
は、ユネスコ（国連教育科学文化機関）がすすめる理念を学校
現場で実践することを目的に1953年に発足。現在175カ国
7800校あまりが参加、日本では23校が参加
しています（2007年11月現
在）。ESDを柱に「地
球規模の問題に対する国
際システムの理解」「人
権・民主主義の理解と促進」
「異文化理解」「環境教育」
の4つの視点を取り組む。



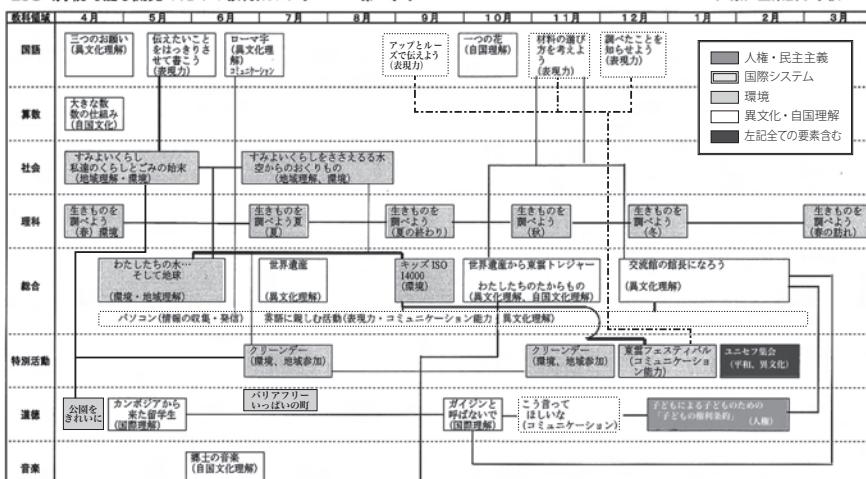
4年社会科「私たちのくらしと水」

ESD カレンダー（東雲プラン）を軸に、まさに学校教育の要である授業を中心に、すべての教科・領域にわたり ESD の指導がすすめられています。

2007年度の4年生の取組みを「環境の視点」からみてみましょう。(図参照)社会で「すみよい暮らし私たちのくらしとごみの始末」「すみよい暮らしをささえる水 空からのおくりもの」という単元を学びます。それが国語の時間の壁新聞づくりにつながります。発展として、総合の時間に、「私たちの水、そして地球」の単元を設けると児童の意識は世界に広がります。そして、自分たちにできる具体的な行動として家族とともにキッズISO14000を取り組んだり、特別活動でのクリーンデーに参加したりという流れなっていきます。今年は、温暖化対策の情報提供ということで、<日本経済新聞社・環境授業>として、岩谷産業・プラスエムの協力を得て、水素エネルギー車づくりの授業を行い、温暖化対策についても学びました。

ESD(持続可能な開発のための教育)カレンダー 第4学年

江東区立東雲小学校



※各学年の ESD カレンダーは東雲小学校ホームページを参照ください

これらの学びの成果は、11月の東雲フェスティバルで全校児童にむけて発表され、また、12月に東京ビックサイトで開かれる「エコプロダクツ展」のステージ発表にも挑戦しました。

このような学びを「環境」だけではなく「国際システム」「人権、民主主義」「異文化理解」の視点に関しても、さまざまな教科を結んだ学習を、全学年で年間を通じて取り組もうとしているのです。

指導要領の中身を教科横断的に、環境や人権などの4つの視点でつなげること、そして、実践をもとに児童から発信し、保護者・地域まで広げていくことが大切です。「どこの学校でも、すでにすばらしい実践を日々積み重ねているはずです。それらを ESD の視点でつなぐことで、ユネスコスクールの実践に早変わりしますよ」と手島先生は言います。

学校を開く、学校から聞く

手島先生は、地球温暖化の影響による20年後の地球がいかに危機的かという鋭い問題意識をもち、今、ESD をすすめなければならない、と考えます。こうした熱意を伝えるための工夫が、廊下に貼られた200以上の活動事例の写真です。お互いの授業の関連性がみえ、部分だけでなく東雲小

の教育全体もみてきます。教師のチームワークはこうして育まれました。

そして、児童も教師も、さらには保護者も自分たちの学校に対して自信や誇りをもつようになります。児童からは、以前にも増して明るくのびのびした表情が多くみられるようになりました。児童が学んだことを、家に帰って家族に話すと、保護者も刺激されて関心を深めます。

東雲小では、地域に「学校を開く」と同時に、学校から地域へむかって、さまざまな手段で発信し続けています。ESD はどこで実践されるべきなのか？ 東雲小の答えは「学校における教科・領域の学習のなか」。ここが変わらなければ教育全体も変わらない、教育全体が変わらなければ社会も変わらない、ESD はすべての学校で取り組むべきテーマだというメッセージは、ESD の10年の原点ではないでしょうか。（取材報告：上條直美）



エコプロダクツ展での発表

シリーズ 学びの場をデザインする ⑦

チョコレートから世界が見える — NGO と教員で ESD 教材を共同開発

(財) アジア・太平洋人権情報センター (ヒューライツ大阪)

ヒューライツ大阪と大阪府立学校人権教育研究会では、ESD& 多文化教育教材づくり共同セミナーを 4 年間にわたり開催してきました。この共同プロジェクトは、ヒューライツ大阪が国際人権教材奨励事業 (AWARD2004 ~ AWARD2006) で収集した国内外の人権教育資料の分析を通じて、日本の学校でも活用できるすばらしい教材の素材を自分たちで発掘し、開発・環境・人権をつなぐ ESD 教材づくりをすすめるというものです。

2005 年度には、写真家宇田有三さんのスライドショー「ゴミに生きる人ひと」の教材化、2006 年には、毎日新聞社のビデオ「世界の難民は今」などを活用した難民学習シナリオ（難民体験演劇ワークショップ）、子どもの権利シナリオ（ストリート・チルドレン体験演劇ワークショップ）などの教材開発と実践をすすめてきました。そしてプロジェクト 4 年目の 2007 年度に選んだのが、「チョコレート & カカオ」を題材にした ESD 教材の開発です。

教材づくりのプロセスもワークショップで

2007 年 5 月からプロジェクト会議を 15 名のメンバーで月 1 回開催し、出版物やインターネットでの資料収集、製菓メーカーやフェアトレードショップへの現地取材を実施。この結果、チョコレートやカカオの学習用教材は、コーヒーやバナナ、エビ、パーム油などにくらべ日本ではまだ少ないこと、欧米では多くの教材があるが児童労働とフェアトレードに焦点化したものが多いことなどが明らかとなり、開発すべき教材には、それらにプラスした視点を盛り込むことを決めて準備をすすめ、8 月に第 1 回 ESD & 多文化教育教材づくりワークショップを 2 日間で開催しました。

第 1 回ワークショップは 2 部構成で、第 1 部は、AVC (NPO 法人アジア・ボランティア・センター) の荒川共生さんをファシリテーターに迎えて「ワークショップ体験：パーム油を取り巻く課題について」を全員で体験（のべ 3 時間）し、続く第 2 部で、「チョコレートから世界が見える」教材づくりに挑戦しました（のべ 9 時間）。まず全員でビデオ「100 人の地球村～ガーナのカカオ農園で働く子ども」(フジテレビ、2006 年放映) を見て意見交換（メ

ディア・リテラシー）。次に「チョコレートの基礎知識」について学習した後、4 つのグループに分かれてキーワードの整理を行い、最終的に「教育」、「グローバリゼーション」、「プランテーション」の 3 つのキーワードで自前の教材づくりに挑戦。それぞれの「チョコレート教材」を報告し、評価を行いました。

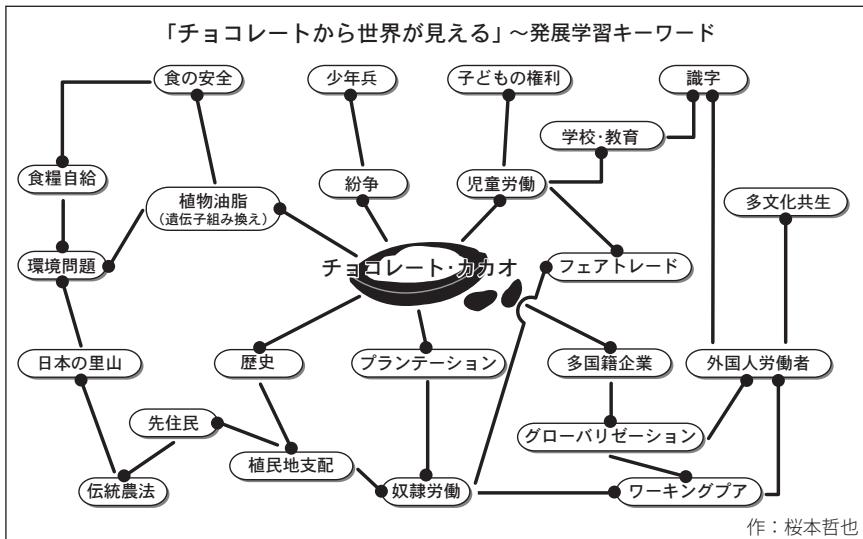
ワークショップの流れ（4 部構成）

- ① チョコレート・クイズ（15 問）とチョコレート食べ比べ
- ② ビデオ「100 人の地球村～ガーナのカカオ農園で働く子ども」を見て話し合い
- ③ ロールプレイ「チョコレートと私たち—カカオ生産・加工・流通・消費の立場から」
※「カカオ農園で働く子ども」、「カカオ農園主」、「チョコレートメーカー」、「フェアトレードにかかる NGO」、「日本の消費者」の 5 つの役割に分かれ、グループで作戦会議。それぞれの立場の要求を出し合い、悪者探しではなく、全員が納得できる解決策をめざす
- ④ ふりかえり

その後、プロジェクト会合を 3 回開催し、12 月の第 2 回教材づくりワークショップ「チョコレートから世界が見える part2」で開発された教材の体験を参加者全員で行いました（30 名規模で 4 時間）。

このワークショップの成果をふまえ、2 時間バージョンのワークショップ・プログラム「チョコレートから世界が見える」ができあがりました。





世界と私たちのつながりに気づく ESD 教材

できあがったプログラムは、08年2月2日に大阪市で開かれたワン・ワールド・フェスティバルで公開しました。ESDセミナー「チョコレートから世界が見える」ワークショップには、学校関係者やNGO、学生など60名が参加し、2時間という短時間でしたがとても盛り上りました。ワークショップの流れは、第2回と同様ですが、とくに「チョコレート・クイズ」と「ロールプレイ」は、参加者にとても好評でした（右「参加者の声」参照）。

私たちに身近な食べ物のチョコレート。どんな人々が生産・流通・加工・販売・消費にかかわっているのかを探りながら、私たちと途上国の人々とのかかわりを考える今回の試みは、大きな成果を収めましたが、このワークショップに続く発展学習の整備も課題としてあります。今回開発した教材をさらに改良してさまざまな場面で活用できるものへと発展させ、今春には完成版「チョコレートから世界が見える—環境・開発・人権をつなぐ ESD 教材」（仮）を刊行していきたいと考えています。（文責：前川 実）

力カオの実
(力カオポッド)



パルプと呼ばれる甘く白い果肉が堅い殻に覆われている。その中に30～40粒の種子（力カオ豆）がある

- | | |
|--------------|---|
| 価値観やスキル | <input type="checkbox"/> 自分で感じ、考える力
<input type="checkbox"/> 世界とのつながり（相互依存）への気づき
<input type="checkbox"/> 社会的公正の実現（国際的な人権基準）への行動力
<input type="checkbox"/> 人権にもとづくアプローチ（Rights Based Approach） |
| 重視されている学びの手法 | <input type="checkbox"/> 参加・体験で主体的に学び、自分の意見まとめる
<input type="checkbox"/> 多様な価値観（世代、職業、立場）にふれ共に学ぶ
<input type="checkbox"/> ステレオタイプをなくし、柔軟に発想する |

参加者の声

- 日常生活でとても身近なチョコレートだから、消費者の行動で世界を変えることができると改めて思った（学生）
- それぞれの立場で話をしてことで、一筋縄ではいかない複雑さがよくわかった（NGO）
- 途上国で労働を強いられる子どもの役をしました。子どもは主張したくても、主張する場所や相手が限られていて、本当に弱い立場だと思います。途上国の教育援助にかかわった一人として、子どもにとっての学びの場、学校という空間は、途上国といわれている國の人たちにとって生死を分けるほど大切だと思いました（教育関係者）



バナナの葉にパルプごと力カオ豆を包んで約1週間発酵させる。その後、天日乾燥させ、日本やヨーロッパなどに輸送される（資料提供：日本チョコレート・ココア協会 力カオの実も）

財団法人 アジア・太平洋人権情報センター（ヒューライツ大阪）

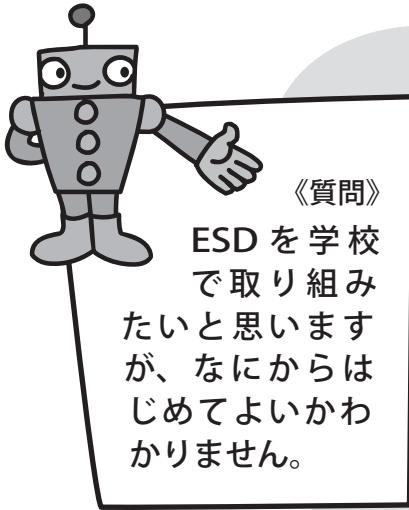
〒552-0007 大阪府大阪市港区弁天1-2-1-1500 オーク1番街15階

電話：06-6577-3578 FAX：06-6577-3583 http://www.hurights.or.jp/index_j.htm

お答えします！ ESD なんでも相談室

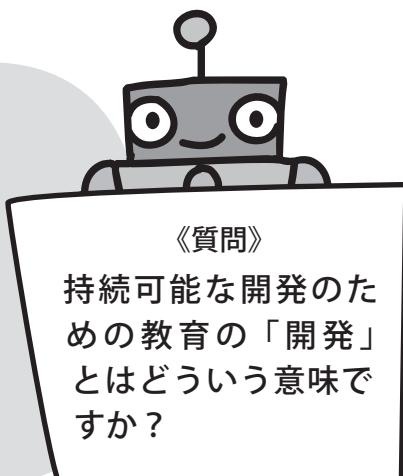
ESD レポート vol.12~14 より

※あなたの質問を ESD レポートで回答します。ご質問は ESD-J 事務局まで



お答えします

学びのテーマは足元にたくさんあります。地域にある自然環境や社会環境から浮かびあがってくるさまざまな持続不可能な課題と、それらに取り組む組織や人たち。あるいは、地域に昔から伝わる歴史や文化。そういう身近にあるものに着目しながら、子どもたちと一緒に町を探検することからはじめてみてはいかがでしょうか？もうひとつは、まずは先生ご自身が、地域の NPO センターやボランティアセンター、環境学習センターなどで、地域の活動について調べてみることをお勧めします。そこで、オモシロそうな活動をみつけたら、まずは参加したり、相談してみてはいかがでしょうか？できる方法で、地域と接していく。そこが地域に根ざした ESD をはじめる、ひとつの方法だと思います。



お答えします

企業活動と ESD の接点は意外とたくさんあります。まず、CSR（企業の社会的責任）ですが、担当外の職員の理解はいかがですか？主体的な参加が得られていますか？形だけではなく、心と内容のともなった CSR とするには、社内の人材育成に「持続可能な社会とは？」、「社会の多様な立場の人を理解し、対話し、企業の役割を考える」といった ESD 的視点を盛り込むことはとても重要です。また、教育プログラムだけでなく、社員一人ひとりが社会的課題に関心をもてるよう、寄付やボランティア参加のしくみをつくる企業や、地域（または海外）で行われている“ESD”を社会貢献のプログラムとして支援する企業も増えています。まずは、みなさんの企業活動を持続可能な社会のための「人づくり」という視点で一度見直してみてください。

ESD 基本用語集

ESD レポート vol.12~14 より

エコミュージアム

日本のエコミュージアムとは、ある地域全体を博物館と見立て、地域を学習し、地域遺産を保全活用し、地域発展に貢献していく市民学習システムのこと。1960年代後半にフランスの博物館学者アンリ・リビエールが構想した新しいタイプの博物館で、ヨーロッパ各国、北米、最近ではブラジルや中国にも広がっている。日本には約20年前に博物館学者の故新井重三氏が紹介し、現在、博物館のみならず地域計画・公園整備・観光事業などの考え方にも応用されている。(嵯峨創平)
参照：日本エコミュージアム研究会 <http://www.jecomis.jp/>

食育基本法

2005年6月成立。食育を知育・德育・体育の基礎に位置づけ、家庭、学校、保健所、地域などを中心に国民運動として推進する法律。これまでの、国による国民の食生活への働きかけは、栄養改善運動、減塩運動、一日30品目のすすめ、食生活指針など、いずれも一定の科学的・栄養学的基準にもとづいた国民への啓蒙運動だった。しかし今回は、「豊かな食文化の継承及び発展」など、「地域に根ざした食」を強く打ちだした点で一線を画する。「健全な食生活の実現」だけでなく、「都市と農山漁村の共生・対流」や「地域社会の活性化」など、めざすものも幅広い。国ではなく、地域の側から食をとらえなおした基本法といえよう。(伊藤伸介)

多文化共生

1980～1990年代にかけて、開発途上国から先進工業国への人（労働力）の移動が増大した。多民族化、多文化化の現象が各地で起こるとともに、異なる国籍や民族に属する人々が互いの文化的違いを認め合い、対等な関係を築きながら社会のなかで共に生きることが求められるようになった。これは、人類全体が地球市民、地球家族となることに向けて避けて通れないこととされ、言語の問題や平等な教育機会の提供などとともに、教育現場では多文化教育の実践がますます重要となっている。(上條直美)

ハーグ平和アピール

史上はじめて世界平和の構築を中心課題に開かれた「第1回ハーグ国際平和会議」の100周年を記念して、1999年、オランダで開かれた「ハーグ世界平和市民会議」のこと。「21世紀への平和と正義のための課題」(ハーグアジェンダ)を採択、国連総会に提出した。会議では、軍縮および安全保障、紛争の防止と解決、国際人道法・人権法、戦争の根本的解決・平和の文化について、50の提案がなされた。日本からも約400人が参加。その熱意が実り、「公正な国際秩序のための基本10原則」の第1に、「各議会は、日本国憲法第9条のような、政府が戦争することを禁止する決議を採択すべき」と盛り込まれた。(岡崎聰介)

ノーマライゼーション

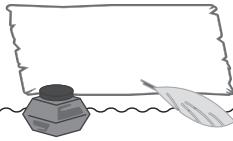
normalization

1950年代にデンマークにおいて、知的障害者の生活を通常の生活状態に近づけることをめざした動きにはじまる、共生の社会をめざした理念である。わが国では1981年の「完全参加と平等」をテーマに掲げた国際障害者年を契機に、その理念が浸透していった。障害があっても特別視せず、一般社会の営みに当たり前に参加し、一個の人間としての権利行使ができる平等な社会をめざすという考え方である。現在では、障害者福祉に限らずすべての社会福祉分野における基本理念となっている。(河邊裕子)

ユネスコ学習権宣言

1985年の第4回ユネスコ国際成人教育会議で採択された宣言のこと。万人に共通する基本的な権利として「学習権」を定義している。宣言では、「学習権とはなにか」を明示している。学習権は、人間個人の発展を中心にして、個人の発展を社会的に保障しなければ実現されない。学習権は、貧困や戦争の克服、健康な生活、産業の発達などに不可欠であると記している。また、学習権をすべての人間の基本的な権利と規定して、学習活動は基本的な権利として保障されるべきであり、学習による個々人の発達が、社会を形成し歴史をつくる主体に変えていくものであることを明記している。(岡崎聰介)

情報 PT メンバーだより



今年度の活動をふりかえって

NPO 法人グリーンウッド自然体験教育センター 野田恵

思いおこせば ESD-J 発足当時から、かかわってきました。

今年度は「ESD 基本用語集」や「学びの場をデザインする」の原稿を一部執筆しました。私は、ESD についての知識が豊富にあるわけではありません。むしろ候補となった「基本用語」を一から調べたり、友人に聞くなどして情報をを集め、編集を引き受けている伊藤さんに、あれこれご意見をいただいて、ようやく原稿を書いてきた、というのが実態です。

誰でも「知っている」と「知らない」ことがあります。にもかかわらず特定のことからを知っている人だけが、なぜか「知識ある人」とされる。そうなるとそうでない人はなんとなく恥ずかしく、劣ったような気持ちになってゆく。このような知は「力」だけれど、それをもつ者のともたざる者の格差を生むといつてもいいかもしれません。

そうではなくて、知っていることをよせ集め、知を広げてゆく営みに誰しもが参加できるような、そんな学びのあり方、開かれた知のあり方があってもいいように思います。開かれた知の営みとして、情報 PT の活動をとらえかえして、もっと多くの人がアクセスできたらいいなあと思います。

PT リーダーの清水さんをはじめ、メンバーのみなさんがこまめに声をかけてくださるので、たまにしか会議に出席できないうえに、ESD の情報を十分にもちあわせていない私でも、息長く活動にかかわることができたように思います。こんな私でもお手伝いできるのだから、来年度は気楽に参加する人が増えたらうれしいですね。今年度の活動をふりかえって、そんなふうに思いました。

つながり、発信するおもしろさ。いや、飲み会か？

日本機関紙協会埼玉県本部 岡寄聰介

「持続可能な開発のための教育」と最初に出会ったのはたしか 2003 年春だったと思います。「つながる意味を考えよう」といったタイトルに惹かれて新宿区のとある小学校で開かれたワークショップへ。一人として知る人もいなかったわけですが、なぜか事務局の方が親しげに「岡寄さん」と声をかけてこられました。あとから聞いた話では、申し込みが一番だったからだととかで、ワークショップのあとはそのまま飲み会へ。なにやら新しい NGO を立ち上げるような話の場の末席を汚していたボクは、気がつくと「村上千里さんを支える会」なるもののメンバーになってしまっていました。たしか会長は A さんだったか H さんだったか ...。ボクはなにがどこまで本気の話かわからないまま、以降、あつまりのあるたびに足を運ぶようになりました。

ボクは平和運動、労働（組合）運動、福祉や社会保障に関わる分野からの参加で、ESD-J では少しお尻がこそばゆい感じがしていますが、「持続可能な社会」をつくっていくうえでは欠かせない分野だし、ESD-J では弱い分野であるようにも思っています。

機関紙づくりの経験を活かしてほしいとボクは情報共有 PT に所属することになりました。年に数えるほどしか顔を出すことができず、PT リーダーの清水さん、伊藤さんにはご迷惑をかけっぱなしです。でも PT メンバーとして ESD-J 内に情報を発信していくなかでは、ボクの問題意識をみなさんと共有していくこともできるし、本当に勉強になります。出会ってから 5 年。いまでは ESD-J に集っている分野の方たちと平和、労働、社会保障の分野をつないでいくのがボクの仕事なのかなと気負ってみたりもします。でも、続けているのは、やっぱりみなさんと飲みに行くのを楽しみにしているからかもしれません。

ボクは原稿を書くのがとても苦手で、おまけに遅筆です。これからもみなさんにお迷惑をおかけすることをあらかじめお断りしたうえで、これからもよろしくお願いいたします。